フィールド(現場)からの風 ⑪

宮田守男

野生動物と共存出来ないか 考えて見ませんか

3月上旬、大町市から白馬に車で移動中、国道に面した佐野坂スキー場駐車場の東側親海湿原に隣接した林から国道横断をする子猿を目撃した。これまで大町市内では、猿と遭遇する機会は多かったが白馬村内で国道横断を目撃したのは初めてだった。少し興奮して、知人に話すと「毎日通勤して佐野坂を通過するが度々出合う」と日常普通の出来事のように話す。以前にも同じ場所でシカが横断する現場を目撃した体験を思い出す。山里の白馬地域では野生動物に出合うことが最近多くなってきているように感じる。

1月中旬、村内の消防署南側の松川河川敷のヘリポートでカモシカと遭遇、物珍しさも手伝ってカメラを構えて近寄って撮影、近くによっていっても人間を恐れている様子は感じられない。ゆっくりと林の中を歩く姿を眺めていると、自然いっぱいの中で生活している様子に喜びがこみ上げてくる。

野生動物の生態が気になり、書店で書籍を探すが特化して編修した書籍には、地元書店では出合えなかった。雪原に残された足跡図鑑があれば楽しいと思ってしまう自分に驚く。昔は当たり前にいただろう野性動物に特別な感情を持つことが今を語っているのだろうか。確かに、毎日の生活の中で山中に入る機会は激減している。昔の現状を知りたくて、何冊かの蔵書に目に通す。

昔を知りたい時によく読む本がある。私の恩師である故石沢清先生の著書「子どもの四季」だ。生前によく話をしてくれた。「人は、その一生を、どういう人にめぐり会えるかによってきまる」。だから相手の話を良く聞きたい。そんな思いがこもった出来事をつづった本だ。その本の中で動物の記載がある。

「ヤマネの研究」に打ち込む少年の話だ。少年が当たり前と思っている地域で生息するヤマネ。教師でも知りえなかった地域の自然の世界。私自身ヤマネと聞いてすぐ姿が思い出せなかった。一見ネズミに見られてしまうが、どれだけの皆さんが区別することができるだろうか。また別の項目で「白馬岳で見たオコジョ親子」の内容も気になって読む。オコジョは、私も八方池周辺や五竜遠見周辺でも多く見かけた経験がある。岩の割れ目から見える愛くるしい姿は実にほほえましい。志賀高原ではマスコットにもなっているが、白馬での関心は今一つだ。

自然を前面に打ち出すと開発に影響するとの考えが無いことを祈らずにはいられない。更に昔の事情を知りたく書籍を読むと、同じ石沢先生の著書「北アルプス白馬物語」の中に記載されている民話が気になる。「マタギの渡右衛門」だ。映画で「マタギ」が注目されて、観賞した人も多いはずだ。この地域にもマタギがいたことが民話から知ることができる。民話は作り話と言えない価値観がある。言葉が言葉で受け継がれた歴史背景があると信じて読み取っている。

この伝説で、語られている野生動物の種類と生息数は多い。熊・鹿・カモシカ・イノシシ・キツネ・タヌキ・テン・モモンガ・イタチ・カワウソ・キジ・ヤマドリ・カモなど野鳥も含め数多くの記載がある。しかしこの記載された動物の中には、今では生息していない現実もある。更に動物の視点から見えてくる図書がある。長沢武さんの著書「山の動物民俗記」だ。この本では、ノウサギ・オオカミ・キジ・ヤマドリ・オオタカについての生態が語られている。より生態を語ることによって、野生動物に関心を持ってほしいとの思いが伝わってくる。

道路で野生動物が車にひかれた現場を見かけた人は多いはずだ。白馬村内でも、獣道と語られている箇所が何箇所かある。そんな所に野生動物に注意の看板が立てられないのだろうか。接触事故で車を破損したとの話も聞く。大事故にならないよう願うばかりだ。山村に野生動物が生息するのは当たり前だ。確かに野生動物の被害を受けた農業現場の情報も良く耳にする。農業の現場では野生動物被害は、農業者だけの問題として処理された現実がある。

しかし、野生動物と頻繁に出合える環境の貴重さは、観光資源としての価値も高い。農業者だけの問題ではなく、農業被害を観光関係者が補填(ほてん)した観光環境が実現できないかと考えてしまう。野生動物との出合いが、地域活性化の資源確保の観点から地域が語り合える日が近いことを祈る気持ちにさせた日でもあった。

カモシカと遭遇、これが日常の出来事のような自然社会にと願ってしまう

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)